Japan society of Home Economics

日本家政学会誌 Vol. 58 No. 12 771～780 (2007)

女子大学生の伝統服に関する意識と行動
—日本とタイの比較—

益本仁雄，宇都宮由佳，滝山桂子*，坂下春奈**，栗原未希**

（大妻女子大学人間生活科学研究所，*上越教育大学大学院学校教育学研究科，
**大妻女子大学家政学部）

原稿受付平成19年7月7日；原稿受理平成19年9月8日

Consciousness and Behavior towards Ethnic Costumes
—A Comparison between Female Students in Japan and Thailand—

Kimio MASUMOTO, Yuka UTSUNOMIYA, Keiko TAKIYAMA,* Haruna SAKASHITA** and Miki KURIHARA**

Institute of Human Living Science, Otsuma Women's University, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8357
**Graduate School of Education, Joetsu University of Education, Joetsu 943-8512*
***Faculty of Home Economics, Otsuma Women's University, Chiyoda-ku, Tokyo 102-8357*

This study of female students, who have worn Western clothes since their childhood, attempts to answer two questions: how conscious are female students about their own ethnic costumes, and how do those who often wear ethnic costumes behave? In July and August 2006, a written survey questionnaire as well as a verbal survey of Japanese and Thai female students aged 18 to 24 years old ($n=203$) were conducted. The students of both countries indicated that their own ethnic costumes are difficult to move in. However, they highly valued them for being "conspicuous," "pretty," and "well-matched for themselves." Japanese female students think that their ethnic costumes have a "peculiar feeling" and cause them to feel "tense when they wear them." Such feelings are presumably caused by the difficulty of putting them on and the fact that they are mainly worn on occasions of rites of passage. Meanwhile, Thai female students have no special feeling towards their own costumes like in Japanese, though they hold them in high regard. The personal character of Japanese female students who frequently wear ethnic costumes are those who enjoy "going to the sea or mountains," are "sensitive to fashion," *etc.* They have active lifestyles. In Thailand, those who enjoy wearing their national costumes are "fond of reading," are "leading a well-regulated life," and are "helping their parents." The female students of both countries are proud of their own traditional culture and wish for it to be preserved.

(Received July 7, 2007; Accepted in revised form September 8, 2007)

Keywords: female students 女子大学生，ethnic costume 伝統服，consciousness and behavior 意識と行動，Japan 日本，Thailand タイ，comparison 比較.

1. はじめに

人は古来より，その時々の生活を衣服に反映してきた．そして，時代を追うごとに知恵や美意識を凝らし，様々な姿に変え，その国や地域の人々によって今日まで受け継がれている（小川 1979）．日本の伝統服である「着物」，タイの伝統服（タイ語：スア，パーシン）は，ともに古くは普段着として着用され，その後変遷を重ね，祭りや伝統行事で着用されてきた．しかし多くの民族にとっての衣服は，国際服ともいわれている洋服が一般的となっており，伝統的な民族服は冠婚葬祭などの特別な日に着用する衣服になりつつある．（金と中川 1998）

ところが最近，日本では「和ブーム」が到来し，和食や和菓子などの食べ物だけなく，和服についてもテレビや婦人雑誌，10～20歳代向けのファッション雑誌等で特集が組まれ，おしゃれとして着用の提案がな

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

されている．また着物の柄，デザインだけなく，着付けや着こなし方，歴史・文化などの知識を深めるために平成17年度より「きもの検定」が始まり，一般の人々の間で日本の伝統服に対する関心が高まっている．

一方筆者らの1990年代初頭からの継続的な現地調査によると，タイでは，祭りに参加する際，農村の中高年女性は今日に至るまで伝統的な服装を着用しているが，若者はTシャツとジーンズ姿が目立つようになった（益本 1993，1995；宇都宮等 2003）．

ところが，2001年OTOP（One Tambon One Product タイの一村一品運動）による地場産業の復活運動の開始を契機として，毎週金曜日に伝統服を学校や官庁で着用する運動など，伝統文化に対する見直しが図られている（宇都宮 2006）．

幼い頃から洋服を着用して育った現代の若者は，自国の伝統服に対してどのようなイメージを持っているのだろうか，また，伝統服の着用と伝統行事への参加・重視度，あるいは普段のライフスタイルにはどのような関係性があるのだろうか．

関連する先行研究として，内田（2005）による着物，民族服を含む服装イメージの比較研究がある．また，金と中川（1998）は和服を含む民族服のイメージ比較を行っている．さらに，川口と石橋（1985）はきものに対するイメージや生活行動に言及している．しかし，和服を含む民族服の着用と生活行動との関連について検討した研究はみあたらない．

本研究では，まず日本とタイの伝統服，特にタイの伝統服の構造について明らかする．次に，両国の女子大学生を対象に，伝統服に対する意識や行動について，面接聞取り調査および質問紙調査を実施し，日本とタイの共通点，相違点に着目しつつ，現代の若者の伝統服に対するイメージや伝統服着用とライフスタイルの関係性について明らかにしていく．

2. 調査研究方法

日本およびタイの伝統服に関する資料について，日本では国立国会図書館，都立中央図書館，大妻女子大学図書館等で文献調査を行った．また，タイの伝統服については，チェンマイ県立及び・チェンマイ市立図書館，チェンマイ大学中央図書館，チェンマイ・ラジャパート大学家政学部図書館等にて文献調査を行った．

伝統服に関する意識と行動については，まず，面接聞取り調査を両国の学生各4名に対して実施した．その結果と金と中川（1998），藤原（1983），小林（1987）等の先行研究を参考に，記述式質問紙調査の質問項目を作成した．面接聞取り調査の結果，伝統服に対する関心は女性のほうが高く，着用機会も多いことから，質問紙調査は女子大学生（以下，学生）を対象とした．

表1．日本とタイの対象者数

（単位：人数）

年齢	国		合計
	日本	タイ	
18歳	22	13	35
19歳	27	12	39
20歳	29	15	44
21歳	41	16	57
22歳	9	17	26
23歳	—	2	2
合計	128	75	203

質問紙調査は，日本では2006年7月に大妻女子大学生128名，タイでは2006年8月にチェンマイ・ラジャパート大学女子学生75名に対して実施した（表1）．

質問項目は，伝統服の保有の有無，借用するか否か，着付けできるか否か，普段着用している服と比較した伝統服に対するイメージ，伝統服着用の頻度と機会，伝統行事への参加度，重要視度，また普段のライフスタイル等である．

分析には，統計ソフトSPSS 13.0を使用し，クロス分析，相関分析等を行った．

3. 日本とタイの伝統服の構造

両国の伝統服については，「民族服とは歴史的運命と文化的伝統を共有する社会的共同体の大多数が伝統的文化財として，これまで身につけてきたし，また現在も身につけている服飾をいう」（杉本 1987）の定義に従い，本研究では簡単に示すこととする．

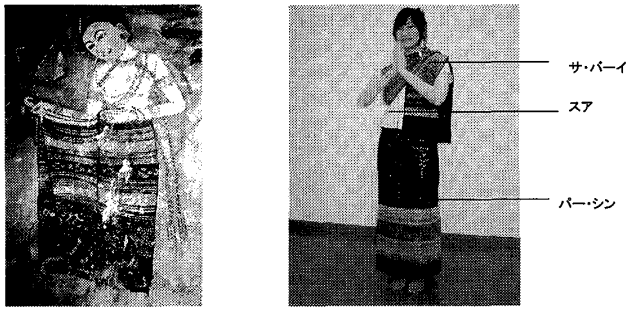
(1) 日本の伝統服

日本の伝統服の構造は，一部式の平面構成である．日本の気候に合わせ，重ね着がしやすい工夫がなされている（東京都私立短期大学協会 1980）．

着物は，主な素材として絹，普段着には木綿・ウール・化学繊維が用いられ，裏地のある袷と，裏地がない単がある．夏に着用されている綿素材の浴衣（以下，ゆかた）は「湯帷子」と呼ばれ，「単」とは違い，広

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics



ランナータイ時代の服装
(Nong Bua寺の壁画)

現在販売されている
北タイの伝統服

図1. タイの伝統服

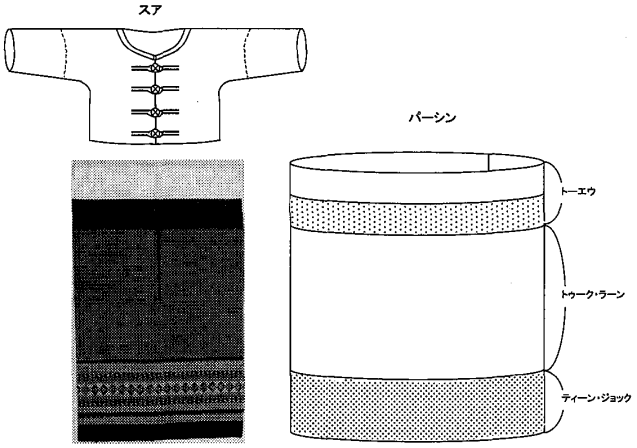


図2. タイの伝統服の構造

袖で入浴後着用するものであった．それが後に単とゆかたの垣根はなくなり，外出にも着用されるようになった（笹本 2002）．

本論では，上記の着物（小袖や振袖）とゆかたを総称して「日本の伝統服」と呼ぶ．しかし，両者は，素材や着用する場が異なるため，項目によっては着物とゆかたを区別して分析する．

(2) タイの伝統服

タイには，山地民を含め多種類の民族服がある(Perve 2006)．本論では，タイで大多数を占めるタイ族の民族服，特に調査地域である北タイで，ランナー・タイ時代*1から着用され，現代まで受け継がれ着用されている服装とする（Phanitphan 2004，図1）．

タイの伝統服は，スアと呼ばれる上衣と，サ・バーイと呼ばれる帯状の肩掛け，パー・シンと呼ばれる下衣から成り（Conway 2002)，スア，サ・バーイ，パー・シンを総称して「タイの伝統服」と呼ぶ．タイの伝統服の主な素材は，絹，綿，および化学繊維である．

スア*2は，前中央を布製のボタンでとめて着用する．ほとんどのものが無地で，図2のように平面的な構造であったが，西洋の影響から立体的な構造になった．スアは着用用途により，衿の有無，袖丈の長短など多様な組み合わせがある（Khongkaeo 1992)．

サ・バーイは，結婚式や地位の高い人を出迎える場合などの正装または，仏教行事で寺へ参拝する際，肩に掛けて着用される．

下衣は，昔，総称してパー・ヌンと呼ばれていた．パーは布，ヌンは履くという意味である．タイの伝統服には横縞の柄が多く，この横縞の柄をパー・シンと呼び，好んで用いたため，この柄の入った下衣のこともパー・シンと呼ぶようになった．パー・シン*3は筒状で巻きスカートのように着用される．着崩れしやすいパー・シンを固定するのに金属でできたケムカット（ベルト）が用いられており，重要な役割を果している．

*1 ランナー・タイは，北タイのチェンマイ，チェンライ，ランプーン，ランパンなど8県を含む地域で，メンライ王によって1298年にチェンマイを首都として建設された王国．1558-1774年ビルマの属領になるも独自の言語や習慣などの文化があり，現在も継承されている．1933年に現在のタイ王国に統一された（石井 1993)．

*2 年間の平均気温が25度を超える熱帯のタイでは，今世紀初めまで，女性は上半身が裸か，あるいはパー・サ・バーイ（長い布，後に短いサ・バーイとなった）を巻いていた．上衣のスアは，その後着用されるようになった（田中 1985)．

*3 パー・シンは4枚の布に分かれる(図2)．腰周りにはトーエウという2枚の綿の布が縫いつけられており，上から白，2番目は着色されたものである．これらは，すべりやすい絹に代わり，腰にパー・シンをしっかり留める役割を果たし，2番目の布は全体の色調を整える役割もしている．最も広い部分であるトゥーク・ラーンは，様々な模様をもつものや無地のものがある．高価なものは，このトゥーク・ラーンから下の部分にタイシルクが用いられる．裾にあたる部分のティーン・ジョックは，複雑で多種多様な色と模様をもつ最も華やかな布が縫いつけられている．ティーン・ジョックの模様からは地域性が読み取れ，ステイタス・シンボルになっている（Prangwatthanakun and Cheesman 1988；Conway 1992, 2003；The National Identity Board Office of the Prime Minister 1994)．模様としては，幾何学模様が基本だが，その他よく用いられる題材としては，象や鳥や花などが織り出されている（Phiphitthaphan *et al.* 2004)．ティーン・ジョックは，特にハレ着のパー・シンに付けられており，普段着にはこの部位がなくトゥーク・ラーンが裾まである．汚れや傷みが生じた場合は，その部分のみを切り取って，替えることができる．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

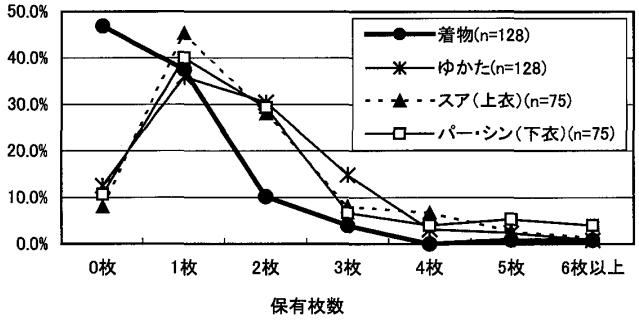


図 3. 伝統服保有枚数

表 2. 伝統服入手方法（複数回答可）

	着物 (n=68)	ゆかた (n=111)	スア（上衣） (n=69)	パー・シン（下衣） (n=64)
購入	79.4%	78.4%	71.0%	60.9%
手作り	1.5%	35.1%	8.7%	6.3%
祖母から	17.6%	8.1%	0.0%	10.9%
母から	23.5%	16.2%	17.4%	20.3%
その他	4.4%	2.7%	2.9%	1.6%

近年では，巻きスカートにみえるようタックを入れ，サイドにファスナーが付けられ，洋服のタイトスカートのように楽に着用できるものがある（松山等 1993）．タイの伝統服は上衣，下衣ともに洋服に構造が似ており，日本の着物に比べると，着用は難しくない．

4. 調査結果と考察

(1) 伝統服の保有，入手方法，着付けの実態

筆者らの日・タイの質問紙調査によれば，伝統服の保有は，日本の調査対象女子学生（以下，日本とする）が 89.8%（115/128 人），タイの調査対象女子学生（以下，タイとする）は 97.3%（73/75 人）であり，タイのほうが保有率は有意（$p<0.05$）に高い．

詳細にみると，日本では，学生の半数が着物を保有し，ゆかたは 9 割が 1，2 枚以上保有していた．高額な着物はゆかたにくらべ保有率が低い（図 3）．

タイでは，スア（上衣），パー・シン（下衣）ともに，1 枚が約 5 割，2 枚が 3 割で，上下衣の保有の間に大きな差はなく，ほぼ 2 ピースのセットで保有している．

入手方法について，日本では 8 割近く，タイでは 6 割以上が，店で購入していた（表 2）．ただし，比較的高額な着物やパー・シンを，両国ともに 2 割ほどが母親から譲り受けていた．

伝統服を賃借して着用する比率は，日本が着物 39.1%（50/128 人），ゆかた 17.5%（22/126 人）に対し，タイは 54.1%（40/74 人）で，タイの比率が有意（着物 $p<0.05$，ゆかた $p<0.01$）に高い．

1980 年代のタイでは，家庭内で楽しみも含め伝統服を作っていたと記録されている（Bowie 1992）．しかし，現代でほとんどが購入や賃借したものを着用している実態が明らかになった．

伝統服の着付けについて，日本では着物 8.6%（11/128 人），ゆかた 35.9%（46/128 人）が自分自身で着ることができる．一方タイは，89.3%（67/75 人）が伝統服を自分自身で着ることができ，日本の着物，ゆかたの着付けに対して有意（$p<0.01$）に高い．日本の伝統服の着付けは，タイの伝統服に比べ難しいといえる．

着付けの習得先については，着物は，祖母 27.3%（3/11 人），着付け教室 36.4%（4/11 人），茶道教室 36.4%（4/11 人），ゆかたは，母親 40.0%（18/45 人）が最も多く，ついで学校 17.8%（8/45 人），祖母 13.3%（6/45 人）であった．一方タイは，母親 56.7%（38/67 人），学校 17.9%（12/67 人），祖母 11.9%（8/67 人）であった．日本の着物は，着付けの難易度が高いため，専門の教室で習得する比率が高い．しかし，日本のゆかたとタイの伝統服の着付けは，半数以上が母親または祖母から着付け技術を習得しており，今日でも伝統文化が家庭内で継承されていた．

また，伝統服の着付けができない者に対して，自分自身でできるようになりたいか否かを質問したところ，日本では，着物 74.3%（84/113 人），ゆかた 95.1%（78/82 人），タイでは 75.0%（6/8 人）が着付けができるようになりたいと回答していた．日本では特に着物に比べゆかたの比率が高く，せめて「ゆかた」だけでも自分自身で着付けられるようになりたいとの願望がうかがえる．

(2) 伝統服に対する意識と行動

1) 伝統服のイメージ

自国の伝統服に対して，普段着用している衣服と比べて，どのようなイメージを持っているのか，15 項目設定し SD 法（Semantic differential method）を用いて分析した．各項目について 3 点法で質問した．例：「動きやすい」数値 1，「動きにくい」に数値 3，「どちらでもない」に数値 2 を与え，両国の伝統服についての平均値を図 4 に示した．ただし日本の伝統服に関しては，着物とゆかたに分けて分析をした．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

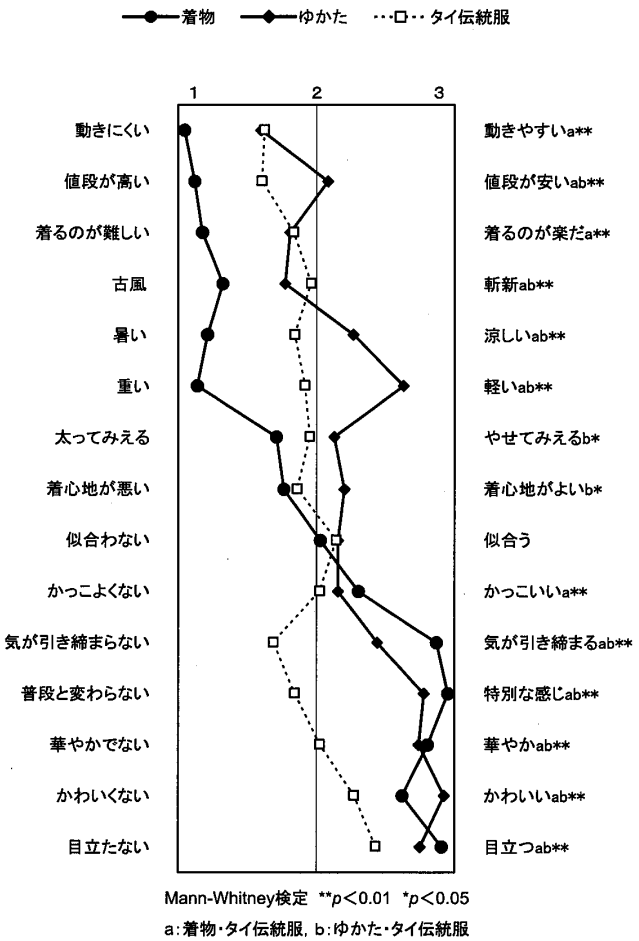


図4．普段着と比較した伝統服対のイメージ

まず，両国で共通する伝統服に対するイメージについて考察する．

肯定的なイメージとしては，両国ともに普段着に比べ伝統服は「目立つ」「かわいい」ことが特徴である．日本の着物とタイの伝統服，ゆかたとタイの伝統服でそれぞれ検定した結果，有意差（$p<0.01$）が認められ，日本の学生は，タイの学生に比べ，伝統服は普段着より目立って，かわいいとの認識が高い．

また「似合う」は両国で有意差がなく，伝統服は普段着と比べ，両国ともに自分たちに似合うとの認識があることが示された．

また，否定的なイメージは，「動きにくい」「着るのが難しい」である．動きにくい，着付けが難しいなど，現代の日常生活のなかで機動性に欠けることが指摘されており，特に日本の着物はタイの伝統服に比べ，その意識の傾向は有意に高い．

次に，両国で相違する伝統服に対するイメージについて考察する．日本では，伝統服を着用すると「気が引き締まる」，「特別な感じ」など緊張感があるのに対して，タイはこのような緊張感はなく，普段着と変わらないイメージがある．また，日本は「古風」であるとの認識があるが，タイでは普段着に比べ斬新とまでいかないものの，「古風」というイメージは有意に低い．

全体を通してみると，日本は，伝統服に対して肯定，否定のイメージがはっきりしているのに対し，タイは各項目の回答が中心化傾向にあり，普段着と比較した伝統服のイメージは日本ほど明確ではないといえる．

表3．伝統服の着用頻度

着用頻度	着物 (n=126)	ゆかた (n=127)	タイ伝統服 (n=75)
週1，2回以上	0.8%	1.6%	2.7%
月1，2回以上	0.8%	0.0%	2.7%
半年1，2回以上	0.8%	3.1%	9.3%
年1，2回以上	5.6%	55.1%	29.3%
ほとんど着ない	92.1%	40.2%	56.0%

Mann-Whitney 検定　着物・タイ伝統服　**$p<0.01$，ゆかた・タイ伝統服　n.s.

2）伝統服の着用頻度と着用機会

伝統服の一年間における着用頻度については，着物は9割の人がほとんど着用していないが，ゆかたは5割強が「年1，2回以上」着用している．一方タイの伝統服は，約半数が「年1，2回以上」着用していた（表3）．

次に，いつ伝統服を着用するのか，その機会について面接聞取り調査で得られた結果から質問項目を設定し，複数回答可で回答してもらった．

その結果，日本では，比率が高い順に「七五三」（86.7%），「祭り」（82.0%），「成人式」（53.1%），「正月」（20.0%），「お茶会」（11.7%），「雛祭り」（11.7%），「結婚式」（7.8%）であった．

一方，タイでは，「正月」（50.7%），「ヤイ・プラ*4」（50.7%），「入安居・出安居*5」（29.3%），「ワン・プラ（仏日）*6」（18.7%），「ロイガトーン（灯篭流し）」

*4 ヤイ・プラ：仏誕節，万仏節，三宝節の重要仏教行事．

*5 入安居・出安居：仏教の祝日である，入安居は，7月下旬，雨期入りの時期で，僧侶は3カ月間寺に籠もり修行をする．出安居は，10月中旬，雨期が明ける時期で，僧侶たちは修行を終える．信徒はこの期間に寺に供物を供えに行く（松下 1995）．

*6 ワン・プラ（仏日）：信者は寺へ供物を持って参拝しに行き，説法を聴く日．

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

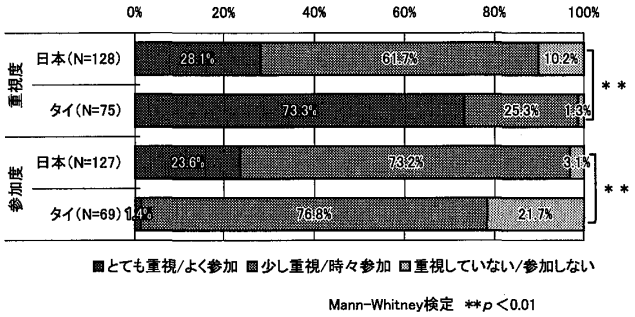


図5．伝統行事に関する重視度と参加度

表4．伝統文化を継承したい意思

継承の意思	日本 (n=127)	タイ (n=75)	検定
今のまま伝えていく	78.0%	61.3%	*
簡略化して伝えていく	0.8%	18.7%	**
伝えたいが知識がない	21.3%	18.7%	n.s.
伝える必要ない	0.0%	0.0%	n.s.
関心がない	0.0%	1.3%	n.s.

Mann-Whitney 検定　*p<0.05，**p<0.01.

(17.3%)，「北タイの踊りを踊る時」(17.3%)，「カントーク祭り（北タイの伝統祭り）」(10.7%)，「親戚や家族が僧侶になる式」(10.7%)，「その他（観光業のアルバイトで，あるいは日常的に）」(13.3%) であった．

日本では，着物はおもに七五三や成人式などの通過儀礼で，また，ゆかたは祭りで着用されていた．タイでは，伝統行事のなかでも特に仏教に関する行事で着用されていた．

(3)　伝統行事・文化に対する意識と行動

両国の学生が自国の伝統行事について，どのくらい重視しているのか，また伝統行事への参加頻度，さらに伝統文化を継承したいか否かについて質問した．

1)　伝統行事の重視度と参加度

伝統行事に対する重視度については，日本では，伝統行事を約3割が「とても重視している」，6割が「少し重視している」に対し，タイでは，約7割が「とても重視している」，2割強が「少し重視している」であった（図5）．タイの学生は，日本に比べ有意に伝統行事に対する重視度が高かった．

伝統行事への参加度については，日本では，「ときどき参加している」が7割で最も高く，ついで「よく参加している」が2割程度あった．タイでは，「ときどき参加している」が7割強で最も高いが，「よく参加している」はほとんどなく，「参加していない」は2割であった．

つまり日本は，伝統行事に参加はしているものの，タイほど伝統行事を重要視していない．一方タイは，伝統行事を重要視しているが，伝統行事が月4回のワン・プラなども含め，頻繁にある（松下 1995）ことから，日本に比べすべてに参加することが難しいため，日本より有意に伝統行事参加度が低くなったと考えられる．

(4)　伝統文化の継承意思

学生に対し，自国の伝統文化を後世へ伝えていく意識があるのか否かについて質問した（表4）．

その結果，「今のまま伝えていくべき」が日本で8割，タイで6割と最も高い．「伝えていきたいが知識がない」は，日本，タイともに2割，「簡略化して伝えていくべき」では，日本は1割に遠くとどかなかったが，タイでは2割であった．「伝える必要はない」「伝統行事には関心がない」という否定的な回答をした者は皆無であり，現代の若者においても伝統文化の継承の意思があることがわかった．

日本では，「今のまま継承する」意思がタイと比べ有意に高く，またタイでは「簡略化して」が2割程度ある．これはタイが日本に比べ，伝統行事が多くしかも複雑であることを示唆している．また，日本では江戸時代に多く見られた伝統文化や行事は少なくなり，すでに簡略化されているため，現状維持のまま伝えていったほうがよいと考えていると思われる．しかし，両国ともに「伝えたいが知識がない」が2割程度あげられている点は今後の課題を示唆しているといえよう．

(5)　ライフスタイルの実態

学生のライフスタイルについて，生活のリズム，余暇の過ごし方，買い物の仕方，流行の取り入れ方，社会規範など11項目設定し，3点法で質問した（図6）．

生活のリズムについて，「夜型の生活」が日本は約7割であるのに対し，タイはわずか2割であり有意差がある．また，「規則正しい生活」については，タイはそう思うが5割に達しているのに比べ，日本は1割にも満たなく，半数以上が「規則正しい生活をしているとは思わない」と回答している．

次に，余暇の過ごし方について，「音楽・美術鑑賞」と回答した者は，両国ともに高いものの，日本が7割，タイが5割強で，日本のほうが有意に高い．「読書」「旅行」については，有意差がない．「海・山へ行く」については，タイは約6割が行くのに対し，日本は2

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

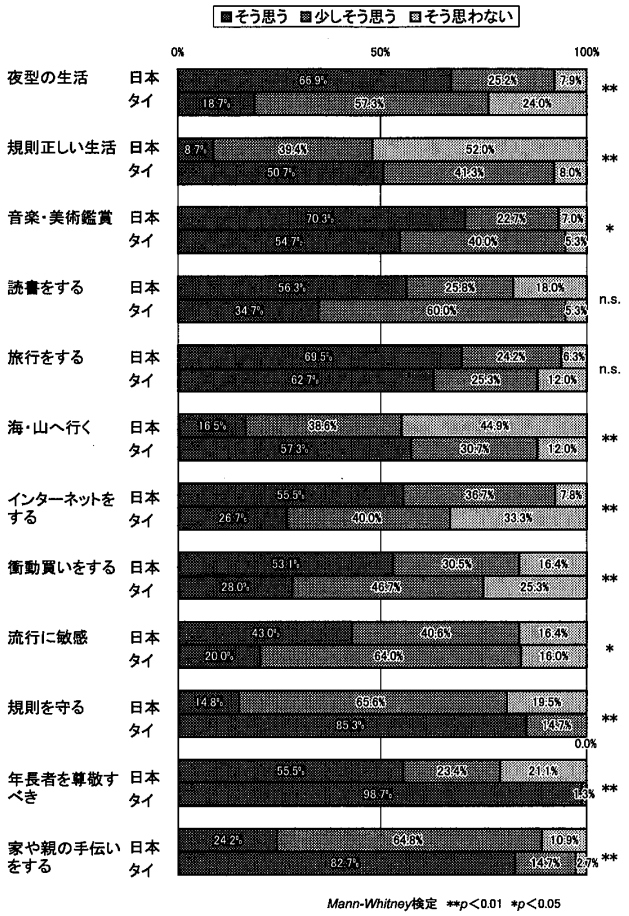


図6. ライフスタイルの実態

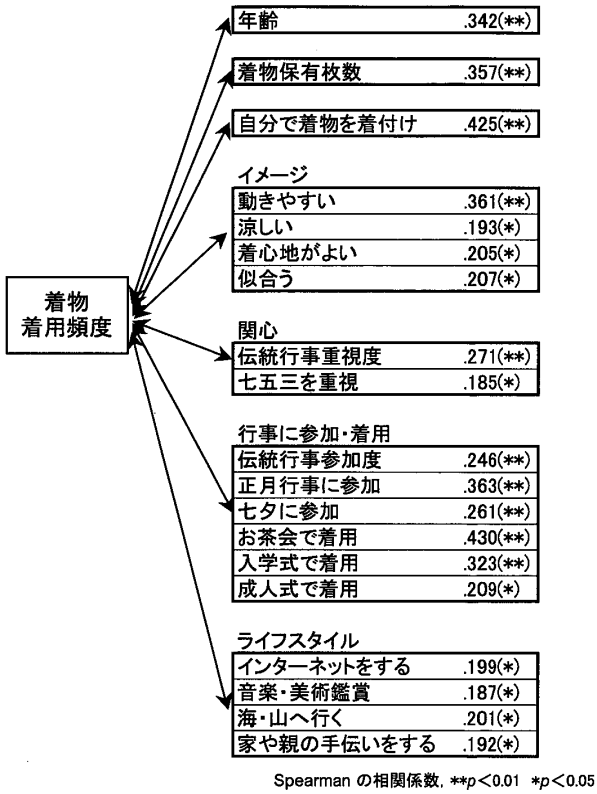


図7. 着物の着用頻度と保有率，イメージ，伝統行事参加・重視度，ライフスタイル等との相関分析

割弱で，半数近くが海や山へ行かないと回答し，有意差がある．またインターネットの利用については，日本が5割強の者が利用しているのに対し，タイは2割強であり，日本のほうが有意に高い．

買い物の仕方については，日本は「衝動買いをする」と5割以上の学生が回答しているのに対し，タイは3割に満たなく，有意差がある．

また「流行に敏感」な者は，日本では4割，タイでは2割であり，日本のほうが有意に流行を気にする傾向にある．

社会規範遵守については，タイの学生の8割以上が「規則を守る」と回答しているのに対し，日本はわずか1割強で，そう思わないが約2割もあり，有意差がある．

また，「年長者を尊敬すべき」では，タイはほぼ全員がそう思うと回答しているのに対し，日本では半数は「尊敬すべき」と回答しつつも，「尊敬すべきとは思わない」が2割にも上り有意差がある．また「親や家の手伝いをする」については，タイは8割が「よくする」と回答しているのに比べ，日本はわずか約2割であり，有意差がある．

(6) 伝統服着用頻度の高い者の傾向や特徴

これまで，現代の若者の伝統服に対する意識や行動，ライフスタイルについて述べてきが，ここではさらに，伝統服着用とライフスタイル等の関係性について，着用頻度の高い者の傾向や特徴を探っていく．

まず，前述した着物，ゆかた，タイの伝統服の保有枚数，着付けができるか否か，伝統服に対するイメージ，着用頻度と着用機会，伝統行事に対する参加度，重視度，年齢，ライフスタイルの項目で相関分析をし，有意な相関があった項目について図示して，総合的に検討する．

日本の着物の着用頻度と高い相関がみられるのは，「自分で着物を着付け」「着物保有枚数」である（図7）．次に「お茶会で着用」「正月行事に参加」に相関があり，伝統文化や行事によく参加している．また「七五三を重視」に相関があり，伝統を重視している者であるといえる．

着物に対するイメージについては「動きやすい」「似合う」「着心地が良い」と肯定的である．ライフス

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

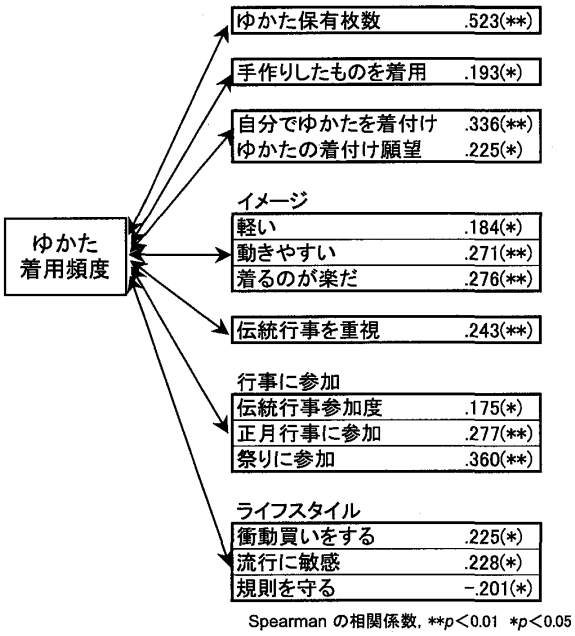


図 8.　ゆかたの着用頻度と保有率，イメージ，伝統行事参加・重視度，ライフスタイル等との相関分析

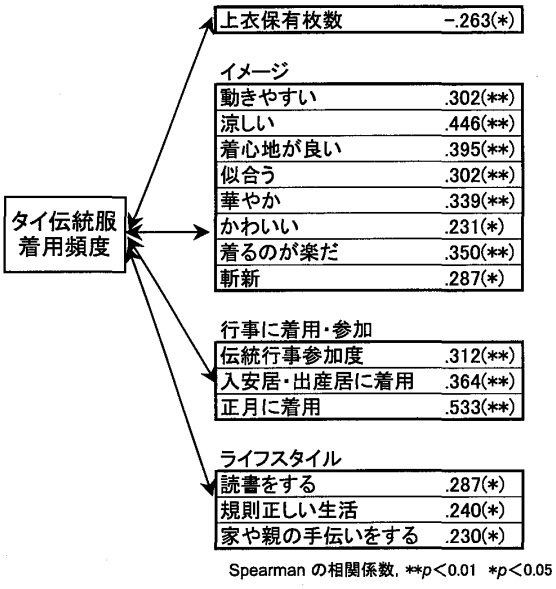


図 9.　タイ伝統服の着用頻度と保有率，イメージ，伝統行事参加・重視度，ライフスタイル等との相関分析

タイルについては，「海・山へ行く」と相関がありアクティブな面がみられる反面，「インターネットをする」「家や親の手伝いをする」「音楽・美術鑑賞」に相関がある．

着物をよく着用する者とは，伝統文化に関心を持ち，伝統行事に自ら着用して参加するなど，行動力がある．また新しい情報を収集し，家の内外問わず活動的なライフスタイルをおくっているという傾向や特徴が浮びあがった．

なお，「年齢」との相関がみられるのは，成人式で振袖を着用する機会が得られたことと関係していると考えられる．

ゆかたの着用頻度と高い相関のある項目は，着物と同様に「ゆかた保有枚数」「自分で着物を着付け」である（図 8）．また「ゆかた着付け願望」との相関がみられ，現在は着付けができないが自分でできるようになりたい気持ちが強い者も多い．「伝統行事を重視」に相関があり，祭りや正月行事によく参加している．

ゆかたに対するイメージは，「着るのが楽だ」「動きやすい」「軽い」と肯定的である．また，着用しているゆかたの中には手作りしたものもあげられている．

ライフスタイルについては，「流行に敏感」「衝動買いをする」に相関があり，さらに「規則を守る」に逆相関がみられた．

すなわち，ゆたかをよく着用する者は，伝統行事を重要と思いつつ，着物をよく着用する者に比べると伝統を継承する実践力が備わっていない．しかし，流行に敏感で，伝統文化の一つであるゆかたに対して，おしゃれの一部として着用を楽しんでいる．ただし，規則は守らなくてもよいと思っている者もみられた．

一方，タイの伝統服の着用頻度と相関のある項目は，まず「涼しい」「着心地が良い」「着るのが楽だ」「動きやすい」といった着用感，「華やか」「かわいい」「似合う」「斬新」といった伝統服のデザイン，という見た目に対する肯定的イメージである（図 9）．次に「正月に着用」「入安居・出安居に着用」など伝統行事に伝統服を着用し参加することと相関がみられる．ライフスタイルについては，「読書をする」「規則正しい生活をする」「家や親の手伝いをする」ことに伝統服着用との相関関係が認められた．

タイの伝統服をよく着用する者は，伝統服に対して着用感だけなく，デザインについても好意的にとらえており，伝統行事の多いタイにおいて，行事によく参加している．また，ライフスタイルにおいても保守的な生活をおくっている者であるといえる．

日本とタイの伝統服をよく着用する者を比較すると，両国ともに伝統服に対する肯定的なイメージや伝統文化に関心があることでは共通していた．しかし，ライフスタイルにおいては，日本は海や山へ行き，流行に敏感で，アクティブな面がみられるのに対して，タイ

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

は読書を好み，規則正しい生活をするといった保守的な面があり，違いがみられた．

5. 終わりに

本研究では，幼い頃から洋服を着用している現代の若者が自国の伝統服に対して，どのようなイメージを持っているのか，またどのようなライフスタイルをおくっている者が伝統服をよく着用しているのかについて，まず両国の伝統服の構造を明らかにし，それを考慮した上で日本とタイの女子大学生を対象に調査を行った．

その結果，両国ともに伝統服に対して，機動性に欠け「動きにくい」というイメージを持ちつつ，「目立つ」「かわいい」「似合う」と好意的であった．日本では，着付けの難しさや通過儀礼での着用から，伝統服に対して「特別な感じ」「気が引き締まる」とイメージしていた．一方，タイでは，日本の学生より伝統を重んじているものの，タイの伝統服の構造が洋服とあまりかわらず，気が引き締まるようなイメージをもっていなかった．

伝統服の着用頻度の高い者のライフスタイルについて，日本はアクティブな面がみられるのに対して，タイは保守的な面がみられた．

日本の若者は，伝統服に対して，着用には難点があるものの，通過儀礼の際に着用する機会があり，親しみを感じている．また，着物やゆかたの生産・流通面で，専門の企業により確固なルートが確立されている．さらに，伝統服を着用する行事や時期ごとに，マスメディアが取上げるため，現代の若者はその影響も強く受け，着物やゆかたに対して，おしゃれ，新たなトレンドとしてとらえているようである．

これに対しタイでは，伝統行事が日常的に行われ，日本より身近である反面，伝統服の着用は，役所や学校主導の伝統文化維持運動であったり，生産・流通ルートは地場産業にまかされており，マスコミによる大々的な宣伝もみられない．

*7 2004年の1人あたりの国民総所得を比較すると，日本は37,050ドル，一方タイの経済水準は，2,490ドルでいわゆる発展途上国である．日本は，すでに昭和47年に2,000ドル超え，昭和50年には4,400ドルに達している（有沢 1994；Alpha Research 2006）．また，タイのテレビや新聞には，自動車・家電製品などの耐久消費財，化粧品，および加工食品の宣伝がよくみられるが，服飾とくに伝統服に関するものはほとんどみられない．

このように，伝統服に対する意識や行動の違いは，両国の社会・経済発展状況の違い，マスメディアの動きの違いなど*7が影響しているものと考えられる．

現代の若者は，両国ともに自国の伝統文化に対し，継承したいと考えている．しかし，伝統文化に対する知識がないという者が少なからずおり，伝統文化の知識をいかに継承させるかが今後の課題となるであろう．

本調査研究を遂行するにあたり，多くの皆様に大変おせわになりました．特に，国立 Chiang Mai Rajabhat University 教授 Poonsook Boonyanate，調査対象となった学生の皆さんに感謝いたします．また，大妻女子大学 Prof. Timothy J. Wright，拓殖大学タイ語非常勤講師 Srivanasont Patthanit さんに深く感謝申し上げます．

引 用 文 献

Alpha Research Co., Ltd. (2006) *Pocket Thailand in Figures*, 9th Edition, Alpha Research Co., Ltd., Nonthabri, Thailand, 420

有沢広巳（監修）(1994)『昭和経済史［中］』，日経文庫，日本経済新聞社，東京，471

Bowie, Katherine (1992) *Trade and Textiles in Northern Thailand a Historical Perspective*, Collected Papers of the Regional Workshop-Seminar on Textiles of Asia: A Common Heritage, Chiang Mai University, 1-29

Conway, S. (1992) *Thai Textiles*, River Books Press, Bangkok, 1-192

Conway, S. (2002) *Silken Threads Lacquer Thrones Lan Na Textiles*, River Books, Bangkok, 1-281

Conway, S. (2003) *Power Dressing—Lanna Siam 19th Century Court Dress—*, River Books Co., Bangkok, 26-27, 38-39

藤原康晴（1983）女子大生のきものに関する規範意識，武庫川女子大学紀要，**32**，139-144

石井米雄（1993）『タイの事典』，同朋舎出版，東京，354-355

川口智子，石橋葉子（1985）“きもの”に対する意識と行動：女子短大生とその母親（家政科編），中村学園研究紀要，**18**，209-216

Khongkaeo Phunsuk (1992) *Kansang lae Yeakbaep, Phakwicha Khahakamat Sathaban Paichaphat Chaing Mai*, Chiang Mai, 1-102

金　由美，中川早苗（1998）民族服に対する意識の比較研究—韓・日女子学生の民族服に対する意識の差異—，家政誌，**49**，417-426

小林茂雄（1987）和服の種類と着装場面の規範意識，共立女子大学家政学部紀要，**33**，20-27

益本仁雄（1993）情報化の進展が社会変容におよぼす影響に関する研究—Ⅰ．タイ王国チェンマイ地域における若者の流行に対する意識と行動について，大妻女子大学紀

NII-Electronic Library Service

Japan society of Home Economics

要―家政系―，**29**，283-314
益本仁雄（1995）『市場経済化・情報化にゆれるアンカイ村―北タイの未電化村―』，近代文藝社，東京，191
松下正弘（1995）『タイ文化ハンドブック―道標　微笑の国へ―』，勁草書房，東京，294
松山容子，笹本信子，川上　梅（1993）北部タイにおける生活情報と衣・食生活との関連性―タイ王国の家族における衣生活，大妻女子大学紀要―家政系―，**29**，247-249
小川安朗（1979）『民族服飾の生態』，東京書籍，東京，294
Perve, E.(2006) *The Hill Tribes Living in Thailand*, Prachakorn, Chiang Mai, 1-100
Phanitphan Withi (2004) *Pha Lae Singthakthothai*, O. S. Printing House, Bangkok, 1-128
Phiphitthaphan Samnak, Haengchat Satan and Sinlapakon Krom (2004) *Phatho Phuenmueang Phak Nuea (LAN NA)*, Krom Sinlapakon Krasuang Watthanatham, Bngkok, 1-462
Prangwatthanakun Songsak and Cheesman Patricia (1988) *Lanna Textiles Yuan lue Lao*, Amerin Printing Group, Bangkok, 1-108
笹本信子（2002）『新日本構成学―基礎理論・実習―』，相川書房，東京，29，74，120-122
杉本正年（1987）『韓国の服装』，文化出版局，東京，131-178
田中千代（1985）『世界の民族衣装―装い方の知恵をさぐる―』，平凡社，東京，50-51，99-101
The National Identity Board Office of the Prime Minister (1994) *Thai Textiles Threads of a Cultural Heritage*, The National Identity Board Office of the Prime Minister, Bangkok, 1-127
東京都私立短期大学協会（編）（1980）『和服の構成』，酒井書店・育英堂，東京，1-5
内田直子（2005）人形モデルによる日本人と韓国人の服装イメージの比較：日韓の大学生の場合，夙川学院短期大学研究紀要，**31**，1-8
宇都宮由佳（2006）タイ北部の人々にとってのカノムタイとは―その構造と機能―，家政誌，**57**，271-286
宇都宮由佳，益本仁雄，大澤清二（2003）北タイの3地域における児童・生徒の食生活とライフスタイルについて，家政誌，**54**，365-376

NII-Electronic Library Service